

2017年4月16日 イースター礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 24章 18～25節

説教：わたしは三日で神殿を建てる

はじめに

今日は、主のよみがえりを覚えるイースター礼拝となっています。ところが開いている聖書の箇所は、主のよみがえりとまったく関係がないように見えて戸惑われたかも知れませんが、でもここにも主のよみがえりが示されているのです。それはどういうことか。これから見てまいります。

事の発端は、ダビデが自分の力を誇るために、神が定められた手順を省略して人口調査をしたことから始まります。調査結果の報告を受けたときダビデは満足します。ところが時間が経つうちに、心の中がうずき始めます。そこでダビデは、すぐに罪の告白をします。

「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。」罪の告白をしたのだから赦されるだろうと思いました。ところが次の日、神は思いがけないことをダビデに語ります。七年間、イスラエルに飢饉があるのがよいか。三ヶ月間、敵に追われるのがよいか。それとも三日間、国中に疫病が蔓延するのがよいか。三つから一つ選べ。ダビデをこれを聞き、神にお任せしますと答えます。そうするとすぐに疫病が下され、七万人が倒れてしまいました。民を打っている御使いを見たとき、ダビデは震え上がります。追いつめられたダビデはこう叫びます。「罪を犯したのは、この私です。私が悪いことをしたのです。この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」

そのとき、主の御使いがエブス人アラウナ

の打ち場のかたわらに立っていました。

1 アラウナ

1) 外国人

今日はその続きです。この叫びを聞かれた主は、預言者ガドを通して、エブス人アラウナの打ち場に上って、主のための祭壇を築きなさいと告げます。エブス人とは、エルサレムに昔から住んでいた現地の人たちですから、外国人です。ダビデが王となったときには、ダビデに逆らっていた人たちです。人の目には、祭壇を築くにはふさわしいとは思われないのですが、主はわざわざそういう所を選びます。

2) 打ち場

ここに打ち場というのが出て来ます。少し説明します。麦の穂を刈り取ると、もみ殻と実を選り分けなければならない。どうするか。両手で持てるくらいの大きさで、ちりとりを大きくした形の「箕」と呼ばれるものに載せます。それを数十センチ、上下にふるいます。風が吹いていると、軽いもみ殻は遠くに飛ばされ、実の部分だけが下に残る。そういう作業をするのが打ち場です。ですから風が吹く場所でなければいけません。小高い所ということになります。20節に「アラウナが見おろすと」とあります。イスラエルの王が直々に、外国人の自分の所へ来る。それもアラウナが高い所において、下から上ってくるのです。アラウナは大変驚き、地にひれ伏してしまいます。

2 ダビデ

1) 上る

ダビデは、イスラエルの王です。外国人でしかも何の地位もない平民が所有する土地を買うのなら、わざわざ自分で出かける必要はありません。全部部下にやらせればよい。ところが、ダビデは自ら出かけます。下から上っていきます。ダビデは自分が犯してしまった罪の重さを自覚しています。たとえ王にふさわしくない振る舞いに見えても、自分の手でやるべきだと考えています。

2) 神罰が民に及ばないように

なぜこんな所にイスラエルの王が来るのかと頭をかしげていたアラウナに、ダビデはこのように説明します。21 節後半。「あなたの打ち場を買って、主のために祭壇を建てるためです。神罰が民に及ばないようにするためです。」

ここで神罰と言っていますが、具体的には疫病のことです。どうして疫病が蔓延したのか。はっきりしています。ダビデが罪を犯したからです。罪は必ずさばかなければなりません。これが神の原則です。神はどこまでも公平な方で、えこひいきはありません。ここだけ見れば厳しいように聞こえるかも知れませんが、でも 16 節には、「主はわざわいを下すことを思い直し (た)」とあります。主は思い直すのです。なぜでしょう。私たちを愛しているからです。どんなに罪を犯したとしても、滅ぼし尽くすことはしたくない。何とか救いたい。救いの道を残したい。それで神は思い直して、わざわいを下そうとする御使いの手を止めさせます。

3) 代金を払う

でも、それは罪のことを忘れてしまうとか、水に流してなかったことにする、と言う意味ではありません。一度犯した罪はどんなに小さなものであろうとも、必ずさばかなければならない。神が造られたこの世界できちんと公正を保つためには、そうする必要があります。そうするとここで一つの矛盾が生じます。一方では罪をさばかなければなりません。でももう一方では、さばきの手を止めたいとも願う。この矛盾をどのように解決するのでしょうか。

そのことは、ダビデとアラウナのやりとりで現れてきています。アラウナは、ここにやるものを全部ただで差し上げますと、申し上げます。イスラエル王が恐ろしくて、お金をくださいなどとは言えなかったのでしょうか。でもダビデはこう言います。24 節。「いいえ、私はどうしても代金を払って、あなたから買いたいです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のけにえをささげたくありません。」

それで実際に銀五十シケルが支払われました。そうして祭壇が築かれ、全焼のいけにえを和解のいけにえがささげられました。その結果、神罰はイスラエルに及ばないようになったとあります。代価が支払われたので、いけにえがささげられたので、罪の贖いが行われました。それで、神はさばきを思い直されました。これが神の用意された解決の仕方でした。

3 イエス・キリスト

1) 十字架

ダビデがしたことは、すべて主イエス・キリストがしてくださったことを目に見える形で示しています。そのことが最もはっきり

と示されたのが十字架でした。ダビデがアラウナから代金を払って打ち場を買い、そこに祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげたら、神罰は止まりました。罪から贖われるには、代金を支払う必要があります。でも私たちには払いきれない。できない私たちに代わって、主ご自身がご自分のみからださがさげられます。アラウナの打ち場のかたわらにさばきを行う主の使いが立っていましたが、主の十字架のかたわらには、私たちをさばこうとする御使いが立っていたということです。主はその御使いの手を止め、叫ばれます。「罪を犯したのはこのわたしです。わたしが悪いことをしたのです。この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。あなたの御手をわたしにくだしてください。」それが十字架でした。

2) 神罰はイスラエルに及ばない

でも今日の箇所には、まだ疑問が残ります。ダビデの罪のために死んでいった七万人はいったいどうなるのか。死ぬべきはダビデです。それなのに羊が倒れた。これはあまりにも不公平ではないのか。そのとおりです。もしこのままであれば不公平です。しかし神は公平な方です。であれば、倒れた七万人を取り戻すしかありません。もしそうでなければ神の義はどこにもないことになってしまいます。どこにそんなことが書いてあるのでしょうか。25節を読みます。「こうしてダビデは、そこに主のための祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげた。主が、この国の祈りに心を動かされたので、神罰はイスラエルに及ばないようになった。」

神罰はイスラエルに及ばないようになった。もちろんこれは、疫病が止んだと言う意

味になります。でもそれだけなのか。神罰が止んだというのなら、それまで行っていた神罰はどうなるのか。やったことはすんだこと、ではない。倒れた七万人にも神罰は及んではない、そういうことではないですか。七万人は死んで終わりではない。よみがえるのです。とりもどすのです。

3) 三日で神殿を建てる

ダビデが買ったアラウナの打ち場、そこに築いた祭壇は、この後どうなったのかご存じでしょうか。この同じ場所に息子ソロモンが神殿を建てていきます。その後、こわされたり、再建されたりといろいろありましたが、今エルサレムに行くと、嘆きの壁というものを見ることができます。あそこが神殿の跡になります。

その神殿について、イエスはあるときこう言いました。ヨハネの福音書2章19節。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」人々は、てっきり建物の神殿のことだと思い、そんなことができるはずはないとあざ笑いましたが、21節で「イエスはご自分の体の神殿のことを言われたのである」と説明します。

そのみことばのとおり、主はイースターの朝、墓の穴からよみがえります。わたしにとって最も恐ろしい死といさばきが完全に止んだことを、にご自分のからだをもって証ししてくださいました。